

新撰字鏡の切韻部分について

上 田 正

一、所拠切韻は長孫訥言の系統である

先年貞苜伊德氏^{注1}は新撰字鏡の中の切韻群の字数を三六二八字と数えた。私はその後、日中英仏独に存する切韻残卷四十三点を集めて、『切韻残卷諸本補正』^{注2}を著したが、最近ソ連にあるもう一点を知り得た。これらに広韻を加えた四十五点と新撰字鏡とを対校して、撰者昌住が切韻に従った字数を三四三四字と認定する。かかる多数の逸文を収容しているので、その重要性は残卷に比して劣らないものである。しかし所拠切韻の系統については、故岡井慎吾博士^{注4}が、その韻次が広韻より古い形を存していると述べているだけである。私はさらに範圍を狭めて長孫訥言切韻の系統とする。以下その論証であるが、まず新撰字鏡の反切や訓釈がある特定の切韻残卷にのみ見える文字の例を挙げる。論証に必要な部分のみ摘記し、新撰字鏡の巻数を漢数字で丁数を洋数字で付記する。残卷名の簡称は『十韻彙編』に従う。

新撰字鏡の切韻部分について

- 1 脂韻章母離字 (五3オ) 維字 (六27オ) 萑字 (七20ウ) 麈字 (八16ウ) 「止推反」
- 2 泰韻來母禰字 (四17ウ) 瀨字 (六17ウ) 薊字 (七25オ) 鱗字

- (九4ウ) 禰字 (十一5オ) 「理大反」
- 3 宥韻心母騫字 (八21オ) 「先救反」
- 4 黠韻影母嫫字 (三23ウ) 摠字 (十一1オ) 「鳥八反」
- 5 怪韻影母噫字 (二16ウ) 「鳥異於飢二反」
- 1 は切二と一致し、他本は職追反又は職維反である。2 は王二と一致し、他本は落蓋反である。3 も王二に一致し、他本は息救反である。4 また王二に一致し、他本は鳥黠反である。5 の傍線の又反は王二とP三六九六(2)に一致し、王一・王三は於疑反に作り他本は又反を記さない。

- 6 笑韻精母醮字 (四25オ) 「冠娶礼祭」
 - 7 巧韻並母鮑字 (九4オ) 「瘞魚也」
 - 8 靜韻羊母頰字 (二4オ) 「禾秀」
 - 9 嘯韻定母枚字 (七25ウ) 「論語云以杖荷枚也」
 - 10 鐸韻來母洛字 (六18ウ) 「古作維也」
 - 11 之韻見母諶字 (三8オ) 「諶也」
 - 12 脂韻羣母鯁字 (九3ウ)
- 6の訓は王二のみあり他本にない。7の訓はP三六九三にのみあり他本にない。8の訓はP三六九三に一致し他本は「禾末」に作

る。9の論語の引用はS六一七六にのみあり他本にない。10の訓は王二・DX一三七二にのみあり他本にない。11の訓は「謀也」の誤写であって切二また誤っている。12訓字は切二・P三六九六(1)に一致し、他本は「鯨」に作る。

以上の新撰字鏡と一致する残巻をまとめると、切二・王二・S六一七六・P三六九三・P三六九六・DX一三七二の六種となる。そして他本と記した中には9と12に王二を含むほか、すべてこの六種を含んでいない。王二が王仁煦切韻・長孫訥言切韻・裴務齊切韻の混合本であること、その他の五種は長孫訥言の切韻であることについては、前掲拙著で論証しておいた。すなわち新撰字鏡所引切韻のこれらの反切や訓釈は、長孫訥言とのみ一致し他本と異なるといこととなる。さらにその中でも11の誤写の一致により、切二と最も近いということもできる。

13 暮韻透母菟字(七24ウ)「按説文無草著草是菟絲字」

14 輪韻曉母渙字(六17ウ)「按無黠也」

この二例の部分は王二を除く前記五種に残存せず、王二にこの字体注記の文が見えないが、説文を用い按語を加えるのは長孫訥言の特徴である。切韻諸本は陸法言切韻にそれぞれ増訂していったものであるから、反切釈義ともに共通するものが多く、また同一字に対する増訂は別箇に行なっても偶合するものが自然である。従って他本と異なる部分は撰者の特徴づけるものである。

上述によって新撰字鏡所引切韻は長孫訥言の特色を示すことが理解できたと思うが、長孫訥言原撰のものでなく、後人がそれに増訂したものであるかと考えられる諸点がある。次にその例証を挙げよう。

15 暗韻心母倮字(三22ウ)「蘇暗反兄妻七」

16 獮韻羊母績字(四6ウ)「以淺反長也伯叔字名」

17 蕩韻溪母麋字(十20オ)「丘晃反上閤」

18 輪韻見母瑾字(六8ウ)「古段反左氏傳瑾聲玉瓊説文玉名也」

19 焮韻曉母扉字(一12オ)

20 支韻來母檣字(七4オ)「力移反」

21 厚韻並母悖字(五4ウ) 韻字(五14オ) 暗字(六2オ) 藪字(七24ウ) 藪字(八8オ)「薄口反」

22 效韻莊母癩字(三4オ) 抓字(十9ウ)「側孝反」

15の文末の数字は同音字数と考えられるが、切三・P三六九三は三字、王一・王三は五字、広韻が七字であって、所拠切韻は長孫韻に四字の増加があったものであろう。16の傍線部はP三六九三をはじめ諸本に見えない。ただしこの字とこの訓との関連は未詳であって疑を存する。17はP三六九三に「丘晃反一新加」とのみあり訓は増訂と考えられる。18の訓はS六一七六に「玉斗」とのみあり増訓と思われ。19はS五九八〇に無く増加字と考えられる。20は切二に呂移反、21はP三六九三をはじめ諸本に蒲口反、22はS六一七六をはじめ諸本に側教反とあり、この三例の反切用字の改変は増訂者によるものであろう。従って結論としては、新撰字鏡の所拠切韻は長孫訥言の系統というにとどめておく。

二、切韻部分の訓釈の中に玉篇を併合している

新撰字鏡の序によれば、撰者昌住は寛平四年に初稿の三巻本を勒成して後、昌泰年中に玉篇と切韻とを入手して現存の十二巻本に改帳したという。その際玉篇と切韻の双方から摘出した文字について

はどうしたであろうか。私の調査では切韻の文中に玉篇の文を併合しているという結果になった。以下その併合状況を、現存玉篇資料との関連によって七種に分類し数例ずつ挙げる。傍線部分は玉篇に一致するもの、その他の部分は切韻に一致するものである。

a 玉篇残巻と一致する例

- 23 微韻影母臧字 (九16オ) 「於非反平臧也臧也臧陳艱危也」
- 24 魚韻溪母陸字 (九16オ) 「去魚反開也開也谷也筭也依山谷為牛馬圈」

- 25 尤韻于母訖字 (三8オ) 「羽求反過与尤同過也罪也惡也」
- 26 軫韻章母紆字 (四6ウ) 「之忍反居忍反衣單也緊也急也糺也」
- 27 霽韻精母隋字 (九16ウ) 「子計反去陸也氣也虹也躋字」
- 28 有韻定母紉字 (四6オ) 「直柳反馬繪也」

25には「過」の訓が重出して併合が明らかである。26は「之忍反衣單也」の切韻の文と「居忍反緊也急也糺也」の玉篇の文とを併合して、反切と訓釈とをまとめたものである。27は玉篇子詣反である。28は反切のみ切韻である。王三にも「馬繪也」の訓が見えるが、P三六九三無訓であるので、この訓は玉篇によったものとする。なお玉篇は除柳反である。

b 篆隸萬象名義と一致する例

- 29 彌韻透母戴字 (七24オ) 「丑善反勅也解也備也去貨也」
- 30 皓韻影母臧字 (一11ウ) 「鳥浩(原作告)反臧肉脛脛」
- 31 梗韻見母梗字 (十10オ) 「古杏反大略也楡也強也猛也害也」
- 32 隱韻見母謹字 (三8ウ) 「居隱反敬也信也從也」
- 33 彌韻端母振字 (十10オ) 「知(原作智)演反擗展極也」
- 34 小韻昌母檣字 (七6オ) 「尺紹反堅木也」

- 35 送韻定母仲字 (一27オ) 「直衆反中也」
 - 36 真韻疑母議字 (三8ウ) 「宜寄反謀也擇也圖也語也」
 - 37 之韻莊母緇字 (四7オ) 「側持反黑繪」「紉上字」
- c 篆隸萬象名義と宋本玉篇に一致する例**
- 38 琰韻疑母韻字 (二4オ) 「魚儉反上頤也類也狹(面)銳頤之頁」
 - 39 送韻見母貫字 (十18ウ) 「古送反去獻也告也功也通薦也賜也稅也」
 - 40 陌韻莊母噴字 (二17ウ) 「側伯反至也呼也鳥鳴」
 - 41 震韻羣母瑾字 (五21ウ) 「渠遴(原作羣)反塗也(溝)上之道也」

単線部は万象名義に一致し、二重線部は宋本玉篇に一致する。()部は新撰字鏡の誤脱と考える。

d 玉篇の逸文と一致する例

- 42 陽韻心母箱字 (八7ウ) 「息良反平車藩也竹器」
 - 43 庚韻匣母衡字 (七22ウ) 「渠京反(誤写当作戸庚反)杜衡香草
- 天帝山」

- 44 有韻于母佑字 (一27ウ) 「尤救反扶持也佐也祐也」
- 42は『政事要略』(二590) 43は『香葉抄』44は『令集解』に見える。

e 玉篇残巻の誤脱の例

- 45 感韻溪母歎字 (十一19オ) 「苦感反上貪色未飽也(少也)榴字」
 - 46 梗韻見母梗字 (四6オ) 「梗(統二同)古杏反并索也綱」
- 玉篇残巻に傍線部はあるが()部が見えない。しかし45は篆隸万象名義に46は宋本玉篇に見えるので、新撰字鏡と併せ考えて玉篇残巻の誤脱とする。

f 篆隸萬象名義を補うべき例

47 東韻端母忠字 (二24オ) 「陟隆反平厚也」(謙言也) 敬也直也」

48 寘韻並母被字 (四13オ) 「皮義反去被服也」(蒙也) 及也□也表也(衾也具也) (覃也) 加也」

篆隸萬象名義は玉篇を節略したものであるから、補うべき例は多い。ただ玉篇の文か他書の文かの判定がむづかしい。この二例の(一)部は篆隸萬象名義にも宋本玉篇にも見えないが、玉篇の文の中に含まれている形から考えて、原本玉篇にあったものと推定する。

g その他

49 微韻影母械字 (七6オ) 「於歸反通波寶也」

50 齊韻匣母蠹字 (八20ウ) 「戸圭反又余規反大龜」

51 祭韻昌母瘰字 (三4オ) 「尺制反小兒驚也又胡(原作古)計反解也瘰也」

52 屋韻見母阮字 (九16ウ) 「舉竹反入曲崖又於賣反地險不便也」

53 恩韻見母論字 (二10オ) 「古鈍反去大目也又古遜反」

54 質韻來母腓字 (一12オ) 「力述反腹脂也膺腸間脂也膺也」

49 は切韻群の上声馬韻と智韻との間に記されているが、反切釈義ともに玉篇のものである。切韻群中に玉篇の混入している例として挙げた。50 は切韻の齊韻の文と玉篇の支韻の文、51 は切韻の祭韻の文と玉篇の霽韻の文との併合であって、併合は同字であれば音には頓着しない例として挙げた。52 は切韻の屋韻阮字と玉篇の卦韻阮字との併合であって、類似形異字の併合例である。53 は二反同音であり、54 は玉篇の反切のみ記し、切韻の呂郵反を記していない。

次に切韻部分に玉篇以外の文が混じているかどうかの問題がある。われわれが手にしている玉篇の資料は、玉篇残巻のほかはすべて節略したものであって、この問題の解決は甚だ困難であるが、切韻部分の中で切韻とは考え難くしかも玉篇資料に見えない反切や釈義で、玉篇以外の文と思われるものは極めて少ない。特に玄庇音義に拠ったと思われるものは発見できなかった。もとより同一字に対する訓釈であるから、切韻・玉篇・玄庇・その他に偶合があり得る。従ってこれらの判定は文全体の状況判断によることが多い。しかし昌住が玄庇音義を用いたのは初稿本の際であって、増補に用いた玉篇切韻と玄庇とが分れるのは自然の経過である。

切韻部分の中で玉篇以外の書に拠ったと考えられる例を挙げる。二重傍線を付ける。

55 東韻心母械字 (三22オ) 「息隆宿中二反有械氏契母也」

56 問韻明母問字 (四25オ) 「无運反去究也語也否也又莫奮反疑也訪也遺也命也」

57 尤韻生母蒐字 (七23オ) 「所鳩反春獵又茅蒐草又所牛反茹(原作茹)蘆茜」

58 紙韻常母独字 (八15オ) 「氏尔反見則有兵」

59 燭韻來母某字 (七26オ) 「力六反尊也麴也藍也」

55・56・57 は二つの反切が同音である。そして55は玉篇膏戎反であるから二重傍線の反切は他書のものである。56の単線部は玉篇と思われ、S六一七六・王二は無訓であるから、二重傍線の訓は他書のものと考ええる。57は玉篇所流反であるから二重傍線の反切訓義は他書となる。58は切韻食紙反玉篇時紙反であり、新撰字鏡のこの項は行間に補記の形となっているので、切韻部分以外からの転記であ

ろう。59は切韻力玉反玉篇燭燭反であり、新撰字鏡のこの項は尊字の次にあり、後述の如く本書は同義字を一か所にまとめる傾向があるので、「尊也」の訓のあるこの字を切韻部分以外から転記して尊字の次に置いたものと考ええる。

以上で新撰字鏡の切韻部分の概況が理解できたと思うが、举例以外の部分も考察して全況を数字で示すと次のようになる。計の欄の分母は切韻部分の総数である。Aは玉篇と全同の訓の見える字、Bは玉篇と小異の訓の見える字、Cは玉篇と不一致の訓のある字。すなわち切韻部分の約 $\frac{1}{3}$ に切韻

	平声	上声	去声	入声	計	%
A	166	100	102	84	452	13.2
B	80	44	75	53	252	7.3
C	120	81	56	55	312	9.0
計	$\frac{366}{1495}$	$\frac{225}{627}$	$\frac{233}{653}$	$\frac{192}{659}$	$\frac{1016}{3434}$	29.5

以外の文が含まれていて、小異は玉篇逸文が節略されていることから生じた異同、不一致もほとんどそうであると考えるので、玉篇の研究に新撰字鏡の切韻部分が重要な位置を占めることとなる。

では逆に新撰字鏡の玉篇部分に切韻の文の併合がないかという問題が次に起ってくる。この判定は甚だ困難で詳細な調査を行っていないが、概観的にはその傾向を感じない。新撰字鏡は部首分類であるから、玉篇を先に記入してその中に切韻を併合していくほうが簡便なはずだが、なぜその逆になっているのであろうか。概して切韻の訓積が簡単であって長孫諫言切韻は無訓の字が多いので、簡単に併合したとか、切韻の反切を正統と考えたとか、玉篇切韻の入

手に先後があったとか、種々の推定は可能だが、決定的な理由はまだ考えついていない。

最後に新撰字鏡の文によって玉篇残卷の誤写を訂正し得る一例を挙げてこの節を終ろう。

60 至韻透母諫字（三8オ）「丑知反又丑利反去不知也誤也如聲之傳」

この傍線の部分は玉篇残卷に見えるが傳字を轉に作っている。『正字通』には「諫梵書空谷傳聲」とあり、新撰字鏡が正しく玉篇残卷が誤っているようである。

三、新撰字鏡の記述について注意すべき諸点

a 兩韻字の訓を併合するものあり

61 東韻來母瀧字（六15オ）「盧紅（原作江）反凍沾漬也又南人名瀧也」

62 東韻見母涇字（六15オ）「苦紅反涇濛又直流」

63 早韻溪母歛字（六26オ）「苦管反歛縫字燒鐵炙也」

傍線部61・62は江韻、63は翰韻の訓である。

b 類義字を併合あるいは連続するものあり

64 旨韻心字死字（十一8オ）「漸字同息姉反上漸盡也命盡曰漸」

65 江韻並母腭字（二11オ）「薄江反脹貝」

66 絳韻滂母腭字（二11オ）「匹絳反去脹臬貝」

67 志韻定母權字（七7オ）「直吏反又市力反種也」常母植字（七7オ）「時吏時職一反柱也旁柱曰植又繫縛柱也倚」

68 哈韻來母駮字（五3オ）「落哀反馬八尺」東韻日母駮字（五3オ）「而隆反駮也」

69 尤韻来母鷓字 (八10オ) 「力求反平少美長醜」質韻来母鷓字 (八10オ) 「力質反入 (ミ) 鷓」

64 は類義字の死と漸とを併合したもので、65 以下は類義字を連続した位置に並べたもので、一般に切韻部分は韻の順序に記載してあるのだが、こういう場合は順序が狂っている。

c 類似形の字を併合あるいは連続するものあり

70 質韻船母洙字 (六18オ) 「食聿反水名也」屋韻明母沐字 (六18オ) 「莫卜反浴也洗髮也」

71 東韻来母瓏字 (六8オ) 「盧紅反平玉声又圭為龍文」

72 真韻常母洙字 (六15ウ) 「市朱反水名又莫礼反上」

73 仙韻常母櫛字 (七4ウ) 「市專反又丁果初委二反光 (存疑) 揺也度也」

74 陽韻羊母錫字 (六26ウ) 「与章反兵名与也又馬額飾」

75 腫韻日母揖字 (十10オ) 「而腫反推也擊也又伊入反入讓也」

76 皓韻影母茨字 (七24オ) 「茨茨二同形作蒲 (原作甫) 達反入又烏浩反苦菜也草根也茜 (原作茜) 白花也」

77 夬韻溪母快字 (十5ウ) 「苦夬反熹也可也又苦恠反助也安樂也又於亮反動也強也」

78 屑韻端母睦字 (二10オ) 「丁結反入又於缺反又眈目深白」

70 は類似形の流と沐とを連続した位置に記した例、71 以下は類似形の字の訓を誤って併合した例である。傍線部分はそれぞれ71 腫韻来母瓏字、72 齊韻明母沐字、73 智韻端母と紙韻初母との櫛字、74 錫韻心母錫字、75 緝韻影母揖字、76 末韻並母茨字、77 漾韻影母快字、78 屑韻影母睦の訓である。

d 反切の誤写

新撰字鏡に誤写の多いことは周知のことであるが、今は切韻部分の反切の誤写について、誤の原因を考えながら例を挙げてみよう。

79 歌韻從母睦字 (六10オ) 殘字 (十一8オ) 蹇字 (七22オ) 「昨酒反」

80 青韻定母庭字 (十20オ) 停字 (二27オ) 挺字 (十9ウ) 梲字 (七5ウ) 「打丁反」

81 泰韻溪母曠字 (二17オ) 欸字 (十一19オ) 「草簞反」

82 鐸韻滂母韻字 (二4ウ) 灑字 (六18ウ) 躄字 (二12オ) 「仄各反」

83 齊韻見母計字 (三9オ) 繼字 (四6オ) 櫛字 (七7オ) 「古計反」

79 は昨何反の誤であるが、各所に同じ誤を犯している。所把切韻か、切韻を写し取った草稿かが粗雑な字であったのであろう。80 は特丁反の誤である。これも同じような誤か、あるいは特定母打端母の差を考慮しない倭音による筆写か。81 は莫簞反82 は匹各反の誤で、字形の類似から生じた誤である。83 は古詣反の誤で、詣と同音の一般的な字の計に改めたものであろう。その結果計字において被切字と反切下字とが同字という違例になっている。

84 之韻羣母淇字 (六15オ) 鷓字 (八9ウ) 藜字 (七20ウ) 「其之反」

85 江韻透母靦字 (五17オ) 「丑江丑龍丑用三反」

86 支韻羣母騎字 (五3オ) 鷓字 (七9ウ) 「渠羣居且二反」

84 は渠之反の誤で、小韻首字に「其渠之反」とあったのを読み誤ったものであろう。85 86 の傍線の又反は、それぞれ小韻首字羣字・奇字の又反を誤り写したか、小韻首字の又反は小韻内の字に及ばないという韻書の知識が無かったものであろう。

87 陽韻莊母粧字 (四18オ) 「士莊反」
 88 屋韻羣母餉字 (九4ウ) 「与逐反」
 前者は側羊反、後者は渠竹反の誤で、それぞれその前に並ぶ小韻崇母・羊母の反切を誤り写したものと。

89 屋韻見母趨字 (九7オ) 「駟竹反」
 90 鐸韻精母繫字 (四17ウ) 「倉各反」

前者は挙竹反、後者は則落反の誤で、それぞれその後には並ぶ小韻溪母清母の反切を誤り写したものと。

e 反切用字の略写

新撰字鏡の玉篇群における反切用字の略写については、井野口孝^{注6}氏が述べているが、今切韻部分の状況を挙げよう。略写字に傍線をを施し例文の後に切韻における原字を付記する。

91 蟹韻匣母獬字 (八15オ) 「奚買反」(駭)

92 養韻米母膈字 (一11ウ) 「良將反」(蔣)

93 翰韻端母懸字 (二24オ) 賜字 (八11オ) 狙字 (八15オ) 「得安反」(案)

94 昔韻精母鯖字 (九4ウ) 「次昔反」(資)

95 唐韻匣母湟字 (六16ウ) 「古光反」(胡)

錫韻匣母橄字 (七7ウ) 「古狄反」(胡)

96 線韻邪母浹字 (六17ウ) 「辞巽反」(運)

97 駭韻溪母楷字 (七6オ) 「苦亥反」(駭)

98 末韻溪母闊字 (四25オ) 咎字 (八8オ) 「苦舌反」(括)

99 德韻定母特字 (五4ウ) 「走德反」(徒)

100 霰韻匣母贗字 (十18ウ) 「共統反」(黃練)

91は偶然に同音であるが、92・93は声調を、94・95は声類を、96・

97は韻類を異にする。98・99は当時の倭音でも音を異にするはずだし、100に至っては誤写と重なって音を成していない。

上述のような誤写や篇旁の略写の中には、昌住によるものと転写によるものとが混在しているであろう。これを検討するには全巻にわたって巻別にまた出典別に調査する必要がある。私は切韻部分にとどめておく。

あと書き

以上一百条の例証によって愚見を述べた。新撰字鏡や玉篇に特別の興味を抱いている人には、例証が少く物足りないであろうが、今はこの程度にとどめる。現在、刊行のための準備にかかっている拙著「切韻逸文の研究」の逸文篇には全例を挙げる。最後にこの拙論の作製の過程で、『高山寺古辞書資料第一』^{注7}に付載する篆隸万象名義掲出字索引(白藤禮幸氏編)と同一覧表(宮沢俊雅氏編)をよく利用させていただいた。これは用意の行き届いた誤のほとんどない秀れた力作である。ここに学恩に感謝する。

注1 「訓点語と訓点資料」第12・14・15輯「新撰字鏡の解剖」(昭34・35・36)

注2 『柿堂存稿』(昭10刊) p79~81 『日本漢字学史』(昭9刊) p107~108

注3 東洋学文献センター叢刊第十九輯(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター昭48刊)

注4 「ソ連にある切韻残巻について」『東方学』第62輯(昭56)

注5 『新訂増補国史大系』に拠る。この書の逸文は先賢の拾逸に

出していないので巻数ページ数を記した。

注6 大阪市立大学「文学史研究」17・18「新撰字鏡玉篇群の反切用字」(一九七八・四)

注7 高山寺典籍文書綜合調査団編高山寺資料叢書第六冊(東京大学出版会一九七七刊)

(一九八一・八・一〇)

——親和女子大学非常勤講師——